

成長期スポーツ障害の予防のための運動器検診の重要性

座長：内 尾 祐 司・山 下 敏 彦

パネルディスカッション「成長期スポーツ障害の予防のための運動器検診の重要性」では、6名の演者が本テーマについてその現状や課題並びに克服のための取り組みを様々な角度から発表した。

松井 譲先生(公立雲南総合病院整形)は、平成 17 年から 3 年間に亘って島根県で行った運動器検診を報告した。この検診結果から児童・生徒の運動器疾患罹患率は比較的高く、スポーツ活動と関係があり、効率性の高い検診体制の確立と検診後の指導・治療体制の構築の必要性を述べた。

高橋敏明先生(愛媛大学整形)はコンピュータ支援による効率の良い有効な運動器検診システムについて報告した。これはアンケート調査票をコンピュータで取り込み、スクリーニングし選定した上で、直接検診により指導や医療機関に紹介するもので、効率的かつ追跡調査にも応用できる方法といえる。

射場浩介先生(札幌医科大学整形)は特別支援学校(盲・聾・養護学校)の児童・生徒における運動器疾患の実態について紹介した。肢体不自由養護学校以外の学校においても 35~50%の児童・生徒が運動器疾患を有するものの、要検診者の約半数は整形外科の受診歴がなく、運動器検診の必要性を示した。特殊支援学校での運動器疾患の実態や課題を明らかにした貴重な報告である。

松浦哲也先生(徳島大学整形)は、これまで 30 年近く行ってきた少年野球検診について報告した。少年野球検診によって投球障害を早期に発見でき、病態の悪化を防ぎ、治癒させることが可能であることを長期に亘る経過観察で明らかにした。一方、治療に応じない例も報告し、少年野球での検診・治療の難しさも示した。

鳥居 俊先生(早稲田大学スポーツ科学)は、中学サッカー選手のスポーツ障害予防のために、オスグッド病では超音波断層法による画像検診や筋タイトネス測定によって予防や進行防止を図る取り組みを紹介した。また、腰椎分離症については今後発生予防のための検診項目を確立する必要性を述べた。

最後に、鎌田浩史先生(筑波大学整形)は、個人の運動器検診結果を記録できる「健康手帳」の取り組みを紹介した。本法は運動器検診結果を学校や医療機関で継続的に確認することができ、運動器障害予防や学校と医療機関との連携体制の構築に有効と考えられる。

以上の内容が本学会誌では論文として詳細に纏められている。これらは、いずれも本学会のテーマである「こどもの運動器の健やかな成長を願う」整形外科医を中心とした医師達が精力的かつ地道に積み重ねた取り組みの報告である。多くの学会員にとって、成長期におけるスポーツ障害の実態や課題についての理解がこれらの論文によってより深まれば幸いである。そして、次代を担う子供のスポーツ障害を予防するために運動器検診体制の整備・充実のための支援・協力の輪がより広がることを切望するものである。

(文責：内尾祐司)